

新しい伝統が生まれる窯のまち

— 会津美里町 本郷 —

文／榎本久美子 写真／佐藤公亮



始まりは400年以上前、東北地方最古を誇る。陶器と磁器の二つを柱にした窯業で栄え、全国にその名を広めた「焼きもののまち」会津美里町本郷地区。細い路地には水路が巡り、夏にはホタルも飛び交う。緑多き小さな町に、上と向き合う若き職人達を訪ねる。

自分好みの器を求め 窯元を巡り職人の心につれる

「昭和の時代が空気にとけ込んでいような町並みと、人の笑顔がとても心地良い場所です」と語るのは小澤桃子さん。元来、手作りの器が好きだったという彼女は、会津本郷焼に魅了され、地域活性の活動に力を注いできた。今では窯元の皆さんも「本郷焼のよき理解者」と口をそろえる。「この街の良さは、作り手と使い手との距離が近いこと。どの工房も直売所があり、作品を手に取りながら、窯の歴史や手技について気軽に話を聞くことができると教えてくれた。会津本郷焼は「土もの」「陶器」と「石もの」「磁器」が共存する。現在16の窯元があり、色柄・質感ともにバラエティー豊か。全ての窯元が歩いてまわれる範囲にあるので、あちこち訪ねて気に入った品を探すのも楽しい。手びねりやろくろを使った作陶体

験でオリジナルの器もぜひ手に入れたい。

400年を超す歴史と伝統を 現代に受け継ぐ窯業のまち

会津本郷焼の起源について、「1593年に若松城主・蒲生氏郷が播磨から瓦工を招き城郭屋根の黒瓦を焼かせたことから始まります」と説明するのは、会津本郷焼資料展示室室長の山田公男さん。本格的に製陶が始まったのは1645年。会津藩祖・保科正之が岩瀬郡長沼より陶工・水野源左衛門を招き、冬でも凍み割れない赤瓦の焼成を命じた時とされる。やがて磁器の研究開発が進み、明治中期には旧会津藩士の絵師が絵付けした白磁製品が海外に輸出されるまでになった。その伝統的な技術を継承する老舗窯元の中で、今、若手作家がそれぞれの思いで新たな本郷焼を作り出している。

案内人・小澤桃子さん
神奈川県小田原市生まれ、会津若松市在住。3月まで会津美里町の委託事業である「伝統工芸活性化プロジェクト」の一環で「本郷焼プロジェクト」に参加。現在は会津本郷焼事業協同組合で、購入者と窯元の橋渡しを行う



今年春に、幕末の面影を映す赤瓦へと葺き替えられた鶴ヶ城(若松城)天守閣。当時は会津本郷焼の瓦を使用していた(写真/国府映)



明暦年間(1655~57年)作と伝わる「鬼瓦」。火災や魔除けとして屋根に飾られた。町指定重要文化財



1. 明治前期の磁器(白磁)「染付花鳥文水差」と、文政5年(1822年)に作られた陶器「黒釉徳利」 2. 古い時代の陶磁器など約100点が並ぶ展示室。土・日曜日には室長の山田さんが歴史や展示品を説明してくれる

会津本郷焼資料展示室
大沼郡会津美里町字瀬戸町甲3161-1
(インフォメーションセンター2階)
☎0242-56-4637
開9:00~17:00
休毎週火曜日
(祝日は営業、翌日休み)
料無料 回10台